

みんなの健康ラジオ

『胆石症について（症状と診断）』

（2026年1月8日放送）

横浜消化器内視鏡医会

あおば胃腸内科クリニック

片倉 芳樹

胆石症とは？

- 胆石症とは？
- 胆石症とは、胆のうや胆管に石ができ、時に痛みなど様々な症状を引き起こす病気の総称であり、結石の存在する部位により、胆のう結石、総胆管結石、肝内胆管結石と呼ばれ、一般的には胆のうの中に結石ができる胆のう結石を胆石と呼ぶ。
- 胆のうとは？
- 肝臓は内臓の中で一番大きな臓器で、この肝臓で1日に約500～800mlの胆汁が作られ、胆管を通り、膵臓の出口で膵管と合流し、膵液とともに十二指腸乳頭部より十二指腸へと分泌され、脂肪や炭水化物の消化を助ける。胆のうにはこの胆汁を一時的に溜めておくところで、胆汁を溜め込んだり濃く濃縮する働きがある。

胆石症の症状とは？

- 胆石はなぜ出来るのか
- 胆汁の成分は、ビリルビン、コレステロール、胆汁酸、レシチンを中心とするリン脂質であり、濃縮される過程の中で、胆汁成分の偏りがあったり、細菌感染により成分が分解されることで、その成分が結晶となり石となる。結石ができる過程の違いで、コレステロール結石や色素結石など色々な性状の石ができる。様々な要素が関与するが、体质や食生活が主な原因とされている。
- 胆石の症状
- 無症状のことが多いが、一般的な症状としては、心窓部（みぞおち）から右季肋部（右側の肋骨の下）を中心とした痙攣痛（激しい痛み）が典型的で、これに右肩や背中の痛みを伴う場合もある。また、鈍痛、圧迫感などの痛みと現れることがある。発作は、脂肪の多い食事を摂った後や、食事以後の夜半に起きやすいという特徴がある。痙攣痛発作に伴う吐き気や嘔吐などもしばしば伴う。炎症が加わると発熱もみられ、胆管に詰まると黄疸や肝障害も併発する。

胆石症の検査

- 血液検査
- 胆石発作（疝痛発作）に伴って、血液検査にて炎症反応やAST、ALTなどの肝酵素や胆道系酵素（ALP、 γ -GPT）の上昇が見られれば、胆石の存在を強く疑う。時に、胆のうから落下した胆石が総胆管の出口を塞ぎ、黄疸や急性膵炎を合併すると、ビリルビンやアミラーゼの上昇も見られることがある。
- 画像検査
- 胆石症の検査の中で最も標準的な方法が超音波（エコー）検査で、胆のう結石や肝内結石はほぼ確実に描出できる。
CT検査は、超音波検査ほどの検出率は良くないが、石灰化胆石の検出や胆嚢周囲の炎症を知る上で有用な検査である。
経静脈的胆道造影法（DIC）、磁気共鳴胆道膵管造影法（MRCP）は、主に総胆管結石の検出に用いられ、胆のう結石の術前に総胆管の状態を知るために行われる。
総胆管結石が強く疑われる場合は、内視鏡的逆行性胆管膵管造影法（ERCP）を行い、結石の診断を行うと同時に除去も可能である。